

---

# After Beats!

ほたる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

After Beats!

### 【Nコード】

N7281V

### 【作者名】

ほたる

### 【あらすじ】

SSSの隊員が全て旅立ち音無と奏でが旅立つときに不運にも死んだあとの世界に迷い込んで来た少年の物語です。

初めて小説を書くので至らないところもあると思いますがその時はよろしく願いしますm) (m



突然辺り一体に響くような叫びが聞こえた。

少年はすぐさま声の聞こえた方を屋上の上から覗いた。

声の聞こえた方には茶色い髪をした自分とは異なる少年の姿を確認した。

少年は急いで茶髪の少年のいるところへ走って駆けつけた。

そして、階段を降り校舎の外へ出、茶髪の少年が見えたてきたところでその少年は、

「……………きえ……………た!？」

## 二人目の来訪者

少年は今起きたことが理解できなかった。

目の前でいきなり人が消えた。

わかったことはそれしかなかった。

「どづいづ……ことだよ……」

とっさに少年はその場から走った、というよりは怖くなって逃げ出した。

「どういうことだよ！」

なんでいきなり人が消えるんだ！

どこかに人はいないのかよ！

そうだ！

職員室だ！

職員室なら先生が1人くらいいるはずだ！」

「くっそ！どこにあるんだよ！ってかどんだけこの学校広いんだよ  
！」

混乱と怒りを吐き出しながら広い学校を駆け回っていた。

走り回って30分、やっと職員室と書かれたプレートを見つけ、そこにある扉が勝手に開いた。

走っていた勢いでそのまま職員室に入ろうとした少年は勝手に開いた扉の向こう側にいる少女に気付かずにつつかってしまった。

「っててて、この学校の扉は自動なのかよ」

と愚痴りながら前の方を見ると、

「いきなり、突っ込んできといてそのセリフ？」

と尻餅をついた少女がこちらを睨んでいた。

「ああ、悪い」と立ち上がり少女に手を差し出す。

「まあいいわ。」とその手を借り立ち上がった少女。

「ああ、そうだ。職員室の中に先生とかいなかったか？」

「誰もいないわよ。」

と速攻で切られた。

「っていつかあなたも先生を探しに来たの？」

と少女は続けた。

「あなたもつてことはお前もか…」

落ち込み気味の少年に、

「目が覚めたらこの学校にいたんだけど、どこに行っても誰もいないからしょうがなくここにきてみたんだけどね…」

と少女も落ち込み始める。

しかし少年は少女の言葉を聞き、

「お前も目が覚めたらここにいたのか!？」

と驚きを隠せない。

そして静かに頷く。

その面持ちは決して今誰もいなかったから落ち込んでいるものではなかった。

「ついさっき、道路で通り魔にあって必死に逃げてたんだけど、まさかトラックに跳ねられるとは思わなかったわ…」



その場になんともいえない沈黙が広がった。

「そ、そんなになつたら普通死ぬだろ…なんでここにいるんだよ？  
つてか傷がどうしてないんだよ！？」

「ここが死んだ後の世界だからでしょう？でもまさか学校だとは思  
わなかったわ。」

と悲しげに笑う少女。

「なんで…？オレは死んだのか？でもどうして？うわあああああ  
あああああ！！！！！！！！！！」

何もかも分からずに叫ぶ少年。

「ちよっと、どうしたの！？落ち着いてよ！」

少女は必死に少年を落ち着かせようとする。

「と、とにかく細かい話は後ですから落ち着いてっ！」

少女は少年の肩に手を乗せた。

## 二人目の来訪者（後書き）

そろそろ二人の名前が出てくる頃ですね。

ストーリーを全部考えるのはなかなか難しいですね。

東雲 雪（前書き）

あの状況からかなり無理矢理繋げました。

先が思いやられる…。

## 東雲 雪

あれからどれくらいの間がたっただろうか。

自分が死んだことを覚えていない少年、自分が死んだことを覚えている少女。

少年はパニックを起こしその場に崩れ落ちる。

少女は目の前にいる少年になにも出来ない。

傾いていた陽が落ち、その代わり月や星が空に浮かんでいる。

「さっきよりは落ち着いたかしら？」

長い長い沈黙を少女が痺れを切らしたように打ち破る。

「……………ああ……。」

生気のない虚ろな目をしながら少年は相槌をうつ。

「ちょっと唐突に言い過ぎたわ。……ごめんなさい……。」

と謝る少女に、

「……………ああ……。」

と少年は繰り返す。

「……………」

少女はこの自分が作ってしまった状況困った表情を浮かべる。

「はぁ……。とにかくここにずっといてもしょうがないわ。どこかゆっくり出来る場所に移動しましょ。」

もちろん行くあてなどないが動いた方がましだと判断した少女は少年に促し、歩き始めた。

「……………」  
「あぁ……。」

さっきよりは生気の戻った声で立ち上がりながら重い足を引きずり少女のあとを歩き出す。

とりあえず職員室のあった建物を出て、少女は明かりのついたホールのような建物を見つけた。

そこへ向かい歩き出す少年と少女。

外灯の明かりしかない短い道を暗く、重い空気と共にゆっくりと歩き、ホールへと到着をした。

少女が中を覗き込み、

「どつやらここは食堂みたいね。」

と呟き、中に入っていく。

少年はそのあとを無言でついていく。

やはり食堂の中にはおらず、ただ広い空間にテーブルとイスがあるだけだった。



少年と少女は近くにあったテーブルに向かい合うようにイスに座る。

「やっぱりここには人はいないのね…」

「…そうみたいだな。」

夜風に辺り平常心を取り戻したのか先程とは違う意思のある返事が返ってきた。

その言葉を聞いて少女も気が楽になったらしく食堂全体を眺める。

「ホントに広い学校なのね。ここは。あ、ちょっとお水取ってくるわね。喉乾いてるでしょ？」

少女は食堂内の厨房の近くにセルフサービスの水汲みの機械があるのを見つけた。

「ああ、悪いな。ちょっと頼むよ。」

きこちないが笑顔を浮かべていた少年の返事を確認すると少女はすぐに水をもらいにいった。

「はい、どうぞ。ええと…」

名前を呼んで水を渡そうとしたが数時間一緒にいたせいで名前を知らないことをすっかり忘れていたことに気付いた。

「自己紹介がまだだったわね。」

笑いながら少女は咳払いを1つしてこう続けた。

「私は『東雲雪』よ。よろしくね。」

「ああよろしく。オレは……。ダメだ、思い出せねえ。」

『ちっ』と舌打ちを最後にしてそう答えた。

「どつやら記憶がないようね……。仕方ないわ。思い出したらでいいからとにかく今日は遅いから解散しましょう。」

雪は自分も疲れていることもあるが目の前にいる記憶喪失の少年のことも考えこれ以上考えさせるのは可哀想だと思い判断した。

「……………で、どつで寝ればいんだ？」

当然といえば当然だが死後の世界に来たばかりなので2人とも同じ疑問を抱いた。

「……………分からないわ……………」

とまた当然の答えがでてくる。

「……………じゃあどっすりゃいんだよ？」

なす術もなくその日は食堂で寝ることにした。

東雲 雪（後書き）

まさかの主人公よりも早くヒロインの名前が出てきてしまいました  
（汗）

しかも音無以上の記憶喪失……。過去とかも考えなきゃいけないのに  
なんでこの道を選んでしまったんでしょう……。

いままでで気になったことや感想が合ったら気軽にコメントお願いします  
m ( ) m

## 疑問

ガヤガヤガヤガヤ……。

「……………ん？」

周りが騒がしくなったのか少年は重たい瞼を擦りながら目を覚ます。

「なんだ……こりゃ……………？」

戸惑っているのではない。

ただただ目の前の光景に驚いているのだ。

「おい！ええと…東雲！起きろ！」



昨日学校中を駆けずり回って探しても見つからなかった人が目の前に溢れんばかりにいるのだった。

この光景に唾然としてみると、

「おいお前！昨日寮に帰ってこないでどこにいたんだよ？」

と見知らぬ生徒が少年に声をかけてきた。

「えっ？オレ？」

全く知らない知らない生徒に馴れ馴れしく話しかけられた少年は一瞬戸惑う。

「ちょっと雪！昨日どこにいたの！？」



と少女にも同じように全く知らない生徒に話しかけられる。

「どづいつことだよ、東雲……」

と話しかけられているのを無視して雪に呟いた。

「そんな……分かるわけないわ。とにかくここから一旦離れましょ。

」

そついつて2人は見知らぬ生徒を置き去りにしてその場を立ち去った。

「待てよ！昨日どこにいたんだよ！」

「ちゃんと授業にはでてよー！」

と2人に向けて生徒は言い残した。

「ここまで来れば大丈夫でしょ。」

と2人は川の上の橋で立ち止まる。

「さてと、何が起こったんだろうな。」

顎に手をあてながら少年が言うと、

「まず起こったことからまとめましょう。」

話し合いながらまとめた結果。

- ・ここは死後の世界
- ・突然消えた自分達とは違う制服を着た少年
- ・昨日まで姿を現さなかった生徒たちが朝になって大量に現れたこと

の3つになった。

「死後の世界っていうのは私が死んだことを覚えてることの確認済

みね。  
「

と雪が軽く言うつと、

「じゃああとの2つはそこから辺の奴らに聞いて確認するしかないか  
…」

対照的に慎重な面持ちで呟いた。

「今日はそれぞれ別々に生徒に聞きまくって…4時にまたここでつ  
てことでどうだ？」

なんとか見るこの出来る校庭の時計を見て雪に提案すると、静かに頷いた。

## 疑問（後書き）

こんなにぶつ切りで話を進めていんでしょうかね？

引き続き感想などお待ちしてます

## 死後の世界（前書き）

今回は説明？みたいなのが多くてうまく伝わってないと思います。

下手な文ですいませんm  
———  
m

## 死後の世界

日が傾きかけてきた午後4時。

朝の橋で少年は空っぽのお腹を擦りながら雪を待っていた。

昨日の夜から何も食べていないことに昼休みになって気付いて食堂に行くもお金を持っていない少年はそのままずっと空腹を我慢していたのだ。

空きすぎて『ぐうう〜…』ともならないお腹を擦りながら、

「東雲早く来ねえかな…」

と呟いて橋の手すりに「よいしょっ」と座った。

十分後

「ごめん！遅くなった！」

と走って雪は走って来た。

相当一生懸命走ったのだろう。

頬には汗が額からつたっていた。

『おっ』と少年が言い橋の手すりから降りようとしたのだが、空腹のせいでもよめいて橋に立つことは出来ずに川に落下してしまった。

息をきらしながらその様子を少女はただ見ていた。

「えっ！？嘘っ……」



とらへん言葉とまじり...

体がやけに軽いな.....。

あ、そっか……………。

オレはあのときみたいに川に落ちて死んだのか……………。

……………あのとき？

どんなときだ……………？

思い出せねえ……………

『……………てよー！……………を……………まし……………よー！』

オレを呼んでるこの声は誰だ？

……………東雲か……………。

「いい加減に起きなさいよおおおおお………！」

「っ！！」

雪の大声とともに少年は目を覚ました。

どつやらここは保健室のようだ。

消毒液の独特の匂いが鼻をつく。

「あれ？オレは川に落ちて死んだんじゃない？」

思い出しながら言葉を紡ぐ。

「はあ……。私も真つ赤な川が流れてるのを見たときはホントにぞつとしたわ。それでしようがないからここまであなたの遺体を運んでみたら目を覚ましたんだもの。」

少年が川に落ちてからのことを簡単に説明した。

(じゃあさっきのはいったい……)

と考え事をしていると、

「で、あなたも今日一日この世界のことについて生徒たちに聞いてたんでしょ？」

「ああそうか。」

えっとまず昨日起こったことを生徒たちに聞いてみたんだ。

そしたら昨日学校に全くいなかったはずなのにみんな昨日の夕方は部活をしていたって言うんだ。

しかもその中には陸上部やサッカー部、野球部もいたんだよ。もちろん帰宅部のやつもいたんだけど、オレが昨日見た限りでは校庭には人影1つなかったんだ。それともう1つ。

消えた生徒について聞いてみたんだ。

この世界では人が消えるのか？って聞いてみたら全員に笑われてそんなことあるわけないって言われた。

それで次に大声で叫んで泣いてた生徒が階段のどこにいなかったか  
って聞いたら

姿どころか声さえも聞いた生徒がいなかったんだ。

あと生徒たちと話してて気づいたんだけど、生徒たちと話してるとたまに会話が成り立たないときがある。

それはこの世界について聞いたときだ。

オレたち2人はすでに死んでるだろ。

それでオレは生徒たちにお前たちも死んでるのかって聞いたら今いるのに死んでるはずがないって返ってきた。

他にも生前は何をやった？って聞いたらずっとこの学校にいるかわからないってきたんだ。

つまりオレが言いたいのは

ここにいる生徒はオレたちみたいに死んでここに来たんじゃなくってずっとここにいる機械的な存在だと思っただ。

っと、これが今日のオレが調べた成果だ。

東雲はどんなこと聞いた？」

「ちょっと待って。あなたが多く言ったからまとめてるの。」

と近くにあったメモ帳にペンを走らせていた。

マメな性格なんだなあと思いつながら少年はその様子を眺めていた。

よしっとペンが止まり東雲が少年に向き直る。

「私が今日調べたことは、私たち自身についてよ。」

えっ！？と少年が驚くが無視して雪は続けた。

「私たちが2人も死んでこの世界に来たっていうのはいいわね。  
それで今日の朝普通に話しかけてきたあの2人の生徒。

私試しに授業に出てみたの。  
今までの考え方だと私たちは部外者みたいなもので普通は注意されるべき存在。

でも教室に入ったらまず授業に遅れたことを注意されたわ。  
まるで前からずっとここにいたみたいだね。

昼休みの時間になったら朝のあのこが私のところに来てご飯を食べようって。

それでわかったわ。

この世界で暮らす方法が。

まず寝泊まりは橋を渡ったところにある寮。

それから食事は事務室で毎月もらえる奨学金を使うこと。  
まあそれでご飯を食べてるときにあのこに私たちはいつから仲がよ  
かったのか、いつからこの学校にいるのか、とか色々よね。  
……まるで私が夢見ていたように、普通に学校に行つて、普通に  
授業を受けて、普通に友達と話せる。  
そんな風に私が生きてるときに出来なかったことを叶えさせてくれ  
る場所なんだつて理解したわ。」

## 死後の世界（後書き）

次は雪の過去について書いて書こうと思っています。



『東雲の道』（前書き）

雪の過去です。 m ( ) m

また分かりにくく意味の分からない文になってると思いますがよかったですらどござ。

『東雲の道』

雪の説明を受けた少年はすぐに口を開いた。

「こんな風に普通に学校に行くことが出来なかったのか？」

黙ったまま頷く雪。

「その……嫌ならいんだけどさ……よかったら東雲の……生きてたときの話してくんないかな……？」

言いくそうに少年が聞くと、すっと目を閉じ、静かに開いた。

「わかったわ。」

東雲 雪は誰にも関わらずに生きなければならなかった。

東雲 雪は『東雲 雪』である前に『東雲』の名を繋いでいかなければならない存在だった。

古来から東雲家は剣の道を極め続けてきた家だ。

東雲家に代々伝わる剣の道は業界で『東雲流』と言われ、恐れられてきた。

そしてその東雲家に生まれ二十二代目当主となり二十三代目に『東雲流』を伝えるために生まれてきたのが『東雲 雪』だった。

雪は幼い頃から率先して剣を手に取り稽古に励んでいた。

そのかいあつてか、『初代再来』とまで唄われるように才能を發揮していった。

雪の先代、雪の母『紅葉』は雪が6才の時に通り魔よつて歸らぬ人となつた。

雪は母を歸らぬ人にした通り魔が許せなかつた。

そしてそのとき雪の中に大きな悔の感情が芽生えた。

自分が強ければ母を護れた。

自分が弱いせいで母は死んだ。

母を殺したのは弱かつた自分自身だ。

雪は以前にも増して稽古に励むようになった。

晴れの日も雨の日も雪の日も春も夏も秋も冬も毎日毎日。

そしてそれは突然訪れた。

学校で仲の良い友達が虐めを受けていたのを見つけて、虐めていた3人を近くにあった木の棒で病院送りにしたのだ。

不運なことに1人は死亡、残りの2人は重症を負わせてしまったのだ。

雪は周りから『人殺し』と呼ばれ、助けたその子にさえも避けられてしまった。

東雲家は人を護るためとはいえ  
人を殺めるために『東雲流』があるのではないとし  
雪に剣の禁止、  
ならびに

剣の道を失った『東雲家』が公の場に顔を出すことは

『東雲家』の家紋に泥に塗る行為とし外出の禁止を言い渡した。

それは雪が14才の時だった。

18才となった雪は外出のみを許されるようになった。

4年振りに外に出られた雪は遅くまで夜の街をブラブラしていた。

すると気付くとかかなり裏道に入ってしまったようで迷ってしまった。

人影はなくさ迷っていると近くで物音がしたので誰かいるかもしれないと思い、

音のした方へ行ってみると信じられない光景があった。

そこには街灯に照らされた血だらけ女性が倒れており、その前には手にサバイバルナイフを持っている返り血を浴びた男が立っていた。

男が雪に気付き雪の方へ向き直る。

そこには見覚えのある母を殺した男の顔があった。

恐怖で動けなくなった雪に、不敵の笑みを浮かべながら男はサバイバルナイフを振り上げながら近付いてきた。

雪は恐怖に押し潰されながらも、一步後退することが出来た。

その勢いで走ることが出来たが膝が震えて時々つまずきそうになるが必死に堪えて走った。

その後を逃がさないように男は笑みを浮かべながら追いかけてくる。

大通りに近づくことができ、そのまま出ようとした雪に大型のトラ  
ックが突っ込んできた。

その衝撃に雪は意識を奪われたのであった。

目を覚ましたのは病院のベッドの上で跳ねられたことにより、感覚  
神経の麻痺と失語症に陥った。

東雲家の人は見舞いには来るものの言うことはすべて同じで、  
「何が先代再来だ。ただの『東雲』の恥さらしだ。」  
ばかり。

好きで『東雲』の家に生まれてきたわけでも無いのに何も喋れない  
雪にとって『東雲』の姓は重すぎたと感じた。



そして重すぎる『東雲』の姓に押し潰されながら『東雲家第二十二  
代目当主』は二十三代目を残すことなく、『東雲家』から忌み嫌わ  
れながら息を引き取った。

「これが私の生きてきた人生よ」

『東雲の道』(後書き)

軽く直井のを真似してしまいました。(汗)

### 3 人目の来界者

「私はただ大切な人を護りたかっただけなのに！  
お母さんみたいに大切な人を護れないで失うのが嫌だったから稽古を続けてきたのに！  
護ることさえも許されなくて、大切な人を見つけることも出来なかった！」

そう雪は目に涙を浮かべながら言った。

「私は好きで『東雲』に生まれてきたわけじゃない！  
出来れば普通の女の子として暮らしていたかった！」

少年は何も言うつもりもなく暖かい目で雪の話を静かにいつまでも聞いていた。

泣きつかれたのかいつの間にか保健室のベッドにうつ伏せになって寝てしまった。

「寝ちまったか……。」

そう言つて少年は雪を起こさないように、ベッドから出て保健室を後にした。

建物を出てすっかり夜になった空の下で校庭を眺めていた。

「東雲はここに来る前相当辛かったんだな」と

固まった体を伸ばしながらそう呟く。

『ぐう~~~~……』

空気も読まずに少年のお腹は盛大になった。

「そついや、何にも食べてなかったな。えつと奨学金とやらを事務室で貰って食堂に行けばいいのか。」

雪の話思い出しながら事務室へと急ぐ。

事務室で奨学金を貰って食事を済ませた少年は雪の眠っている保健室へと足を向けていた。

昨日雪が食堂を見つけたときにいた外灯のちょうどその下に照らされるように倒れてる人がいた。

その側へ駆け寄り腰を降ろすと少年が大の字で眠っていた。

また新しいやつが来たんだなと思い揺すって起こす。

「おい、起きろ。おい。」

するとすぐに目を覚ましたがそれと同時に何故か襲ってきた。

「いつてえ……。いきなり何すんだよ。」

と相手を見ると何故か震えている。

しかも襲ったときに出た脇腹のどこを見ながら。

「おい、どうした？オレの腹になんかついて……………」

少年は自分の脇腹を見て途中で言葉を詰まらせた。

その視線の先あったものは『99』の文字。

「なんだ……これ……？」

ぐうあ！あゝあゝあゝ……

あああたたああああ！……！！！！！！！！」

すると行きなり頭に激痛が走った。

『どこに隠れていやがる！とつとと出てきやがね！……くも……り  
……つくも！きりしまつくも！』

「きり……し……ま……つく……も……。そつだ思い出した！オレの名前は  
『霧島 九十九』。」



### 3人目の来界者（後書き）

ついに少年の名前が出てきましたね^^

九十九の過去についてはまだ先ですが、3人目はいったい誰なのでしょう。

## 初めての自己紹介

やっと自分の名前を思い出すことが出来た『霧島 九十九』は記憶を呼び覚ましてくれた少年に礼を言った。

「名前を思い出させてくれてありがとう。オレは『霧島 九十九』だ。お前は？ってなんでそんなに怯えてるんだよ？」

「……………あ、……………僕は…甚八。……………『紅草 甚八』。」

怯えながらおそおすと口を開いた。

「そうか、甚八か。いい名前だな。これからよろしくな」

と握手を求める九十九に明らかに怯えている。

「…………えっと、…その……………僕、実は……………人間恐怖症…なんだ。だから……………握手とかそういうの苦手なんだよね……………」

以外な言葉が甚八から出てきて多少驚いたが、すぐに元に戻り九十丸は、

「そっか、ならしょうがないな。じゃあもう夜だから寝るところに案内するよ」

と言って甚八を連れて雪のいる保健室へと戻ることにした。

「ここがオレたちが寝てる保健室だ。」

自慢気に紹介すると、「……………なんで保健室なんかで寝てるの?」  
と聞かれたので九十丸はざっとこの世界について甚八に話してあげ

た。

「……じゃあ霧島君とあそこで寝てる東雲さんは一昨日ここにきて、普通の生徒が寝てる寮を使わずにこの保健室を使ってるってことね？」

「ああそうだ。って甚八は自分が死んじまったことには驚かないんだな。」

と関心気味に聞くと、

「……そりゃあ死んだって認識はしたけど別に驚くことは無かったよ。……僕眠いからもう寝るね。」

「ああまた明日。」

と甚八がベッドで寝たのを確認したので九十九も寝ようとしたのだが、保健室にはベッドが2つしかないことに気付いた。

1つは雪が眠っていて、

もう1つは今甚八に取られてしまった。

しかも甚八は相当疲れていたのかすぐに寝息をたててしまった。

少し考えていい案が浮かばなかったので仕方なく入り口の近くにあるソファで寝ることにした。

## 翌朝

3人の中で一番最初に目を覚ましたのは雪、その次に九十九が目を覚ました。

「おはよう、東雲」

「おはよう。…あそこで寝てるのは誰？」

甚八が来たことを知らなかった雪は九十九に問いたです。

「ああ、あいつは昨日の夜来たみたいで『紅草 甚八』っていうんだ。かなりの人間恐怖症だからそこら辺は勘弁してやってくれ。」

甚八の名前とどういう人かを大雑把に雪に説明した。

「わかったわ。じゃあ私は朝ごはん食べてくるわ。」

と雪は立ち上がった。

「ああ、悪い。言っの忘れてたけど、オレ、昨日甚八のおかげで自分の名前思い出せたんだ。『霧島 九十九』っていうんだ。改めてよろしくな。」

「思い出させてよかったわね。……やっぱり紅草を起こしてみんなで朝ごはん食べに行きましょう。ね、九十九。」

と窓から注がれる朝陽に包まれながら温かく微笑みながら雪はいった。

「おう！じゃあ甚八起こすよ。」

と甚八に駆け寄っていった。

「で、こいつが『東雲 雪』だ。」

「よろしくね、紅草！」

と先ほど同じような笑顔で甚八に挨拶する雪に対して、

「……………あ、……………えっと……………その……………紅草です……………。……………霧島君、東雲さんこれからよろしく……………」

やはり少し怯えながら挨拶をする。

「よしー！じゃあ朝ごはん食べにいくぞー！」

と九十九の一声で3人で食堂へと向かった。



## すべきこと

九十九たち三人は朝食を取るために食堂に来ていた。

「昨日はあんなに人がいたのに今日は全然いな。またこの前みたいに誰もいなかったりして。」

と九十九冗談をいう。

「やめてよね。あんなのはもう味わいたくないわよ。」

雪は肩をぶるっと震わせる。

「ああそうだ。甚八はまだ奨学金もらってないからオレが奢ってるよ。後で取りに行こうな。」

「……………あ、うん……ありがとう。」

「じゃあ今日は何をする？」

三人とも食べ終わり食後の休憩を取りながら今日のこれからについて話していた。

「とりあえず、紅草の奨学金をもらって、昨日は生徒だけだったから先生に聞き込みをしましょう。」

「……聞き込みって？」

昨日来たばかりで昨日九十九たちがなにを知らない甚八の疑問に九十九が答えた。

「オレと東雲は一昨日来たばっかだろ？そんなとき色々とおかしいと思ったことがあったんだ。それを昨日一日中生徒に聞き回って解決していたんだけど、全くと言っていいほど手がかりが掴めなかったんだ。」

「……おかしいことって？」

「九十九が来たばかり時に見た私たちとは違う制服を着た生徒が消えたこと、私たちが来た日この世界に私たち以外いなかったことよ。」

「

九十九の代わりに雪が簡単に教える。

「……………そんなことがあったんだ……………。」

「んで、今日もバラバラに手分けして聞き込みにするか？それとも一緒に聞き込むか？」

どつちやら今日やることは聞き込みに決定していたようだ。

『死んだ世界戦線』

「今回は紅草がいるから3人で行動した方がいいと思うわよ。」

「……………僕もそうしてもらえると助かる…よ。」

「どうやら2人と3人で行動したいらしい。」

「じゃあ今日は3人で聞き込みな！まずは事務室で甚八の奨学金もらいにいくか！」

校長室前

「なんでいきなり校長室に来るの!？」

と不機嫌そうに雪が九十九に訪ねる。

「いや、だって先生に聞くんだったらトップに聞いた方がいいに決まってるだろ! な、甚八!」

甚八に同意を求めろが、

「……………いきなり校長室っていうのはちょっと……………」

「ほら見なさい! 紅草だって校長室はないって言ってるわよ!」

と雪が追い討ちをかける。

「とにかく！いいから入るぞっ！」

『ぞっ！』に合わせて扉を開く。

それを冷たい目で見つめる雪。

「危ない！……！！……！！」

という叫びでそのまま2人は校長室の中にも押され込まれた。

「いてて…。甚八…いきなり押すなよ。」

「何が危ないのよ!」

と甚八の方を見るがその視線はそのまま校長室の外にある黒い塊へと注がれた。

「なんじゃ…ありゃ…。」

「でっかいハンマー見たいね。」

「……………」

ハンマーについて3人(?)はそれぞれ口にする。



「でもなんでこんなもんが降りてくるんだよ。」

と九十九が新たな疑問を上げた。

「まるでこの部屋に入れたくないみたいね。」

と雪が苦虫を噛んだような顔で付け足す。

「……………ねえ、…部屋のなかすごいよ。」

甚八が部屋の中を歩き回りながら2人に呟いた。

九十九と雪も部屋の中を見てみると、

「……………。」

「……………」。

まさに絶句そのものだった。

3人がいる校長室の中には色々なものが転がっていた。

両刃の斧のハルバード、長ドス、拳銃、パソコン、トランシーバー、犬のぬいぐるみ、手錠、プロテイン、食べかけのお菓子……。

そして一番目をひいたのが校長椅子の後ろの壁に掛けてある『SSS』と書かれた旗だった。

「死んだ…世界…戦…線……………」。

九十九が唐突につぶやいた。

「なにそれ？」

とすぐさま雪が九十九に尋ねる。

「昨日な東雲が寝たあとに腹が減ったから事務室で奨学金もらって食堂行こうと思ったんだ。

それで食堂に行こうと思ったたら迷っちゃって体育館に着いたんだ。中に入るとさ『死んだ世界戦線卒業式』って書いてあったんだ。

体育館の舞台にはさ、そこにある旗がでっかく掲げられてたんだ。」

「じゃあその『死んだ世界戦線』の使ってた部屋がここの校長室ってわけね。」

「それともう一つ。

ここに脱ぎ捨ててあるオレらの制服とは違うこの制服。

これはオレがこの世界に来たときに見た消えてった生徒が着ていたのと同じだ。

多分これが『死んだ世界戦線』の制服になってるんだろっな。」

と九十九が付け足しの説明を終えたときいきなり放送がかかった。

「『全校生徒にお知らせです。

ただいまより十分後に体育館へ集合してください。

校長先生からのお話があります。繰り返します。全校生徒は十分後体育館に集合してください。』」

「……………何かあったのかな？……………霧島君、東雲さん一応行ってみよう…………？」

珍しく甚八が自分から口を開いた。

## 生徒会

放送があつたあと3人はすぐに体育館に向かった。

そこには敷き詰められるように生徒たちは並んでいた。

しかしとてつもなく大きい体育館はまだまだ余裕を持っていた。

しばらくすると校長らしき人が壇上に上がり、

「『え〜』：先日生徒会長の立華と副会長の直井が卒業したので、その代わりの者を募集することになりました。なのでこれから1週間立候補するものは申し出るように。以上。」

解散!』」

と話して終わりだった。

「なんかあんまり来た意味無かったわね。」

と雪がいうと、

「……そうだね。……僕たちには関係ないことだったね。」

甚八も便乗した。

「……まず……1つ。」

と九十九が声を震わせながら絞り出した。

「えっ!?!」

「……霧島君どうしたの!?!」

雪と甚八は九十九に聞くが、無視して続けた。

「どうして……片付けられて……。  
……もう1つ……。  
立華と直井は生徒会だったのか!?!」

いきなりわけの分からないことを言い始めた九十九に戸惑う雪と甚八。

「ちよつと九十九！勝手に1人で喋ってないでちゃんと何があったか教えてよ！」

雪が九十九に説明を要求する。

「ああ。悪いな。」

さつき昨日の夜間違えて体育館に行ったって言っただろ？

そんなときに『死んだ世界戦線』の旗と

それから舞台の前に5個のパイプ椅子が置いてあったんだ。

それでその上には一枚ずつ『卒業証書』が置いてあったんだ。

そこに書いてあったんだよ。」

「だから何が書いてあったのよ。」

「……………『立華 奏』と『直井 文人』の名前だよ。」

何でかは知らないけど5人は卒業した。

それと校長室にあったあの武器とかの量からすると

『死んだ世界戦線』は5人だけじゃないね。」

かなりややこしく、長い説明を受けると

「じゃあその5人が卒業したってことは他の人たちはいないってことね。」

「…………でも生徒会の会長、副会長の2人がいなくなっただってことは『死んだ世界戦線』と『生徒会』はなにか関係があるのかな…。」

甚八からの盲点を突きながら言った。

「甚八（紅草）！いいこと言うな（言うわね）！」

「……………ありがとう…。」

つまり甚八が言いたいことは、『死んだ世界戦線』には元生徒会長の『立華 奏』と元副会長の『直井 文人』の2人がいた。



そうならば学校のトップならば『死んだ世界戦線』のトップでもあ  
るはず。

そして、それを裏付けるのは九十九が見た最後の5人に用意された  
特別な『卒業証書』。

これらを元に今までの疑問はこの死んだ世界のトップが握っている  
のでは無いかと考えたのだ。

「じゃあ生徒会を調べれば全部の答えが出てくるってことだな。  
よし、甚八！生徒会長に立候補してみたらどうだ!？」

といきなりの九十九からの提案。

「……………僕が!?!……………無理だよ。」

当たり前前の答えが返ってきた。

しかし、

「いや、甚八になら大丈夫だ。  
オレたちが気付かないことをこんなにもあっさり言うんだから、  
絶対甚八は生徒会長になれる！」

「そうよ！紅草、私たちがこの世界できちんと暮らすためには謎を  
解決していくしか無いのよ。」

私も副会長に立候補してあげるから会長に立候補して？」

と2人に強く推され、

「……………じゃあ立候補して……………みるよ。」

この瞬間、甚八が生徒会長に、雪が副会長に立候補することが決ま  
った。

生徒会（後書き）

だれか文を書くコツなどを教えてください！（泣）

セリフ繋ぎとか一番やっちゃいけないことですよね（汗）

『Girls Dead Monster』(前書き)

ほとんど九十九目線になってます。

あと少しだけ九十九の過去がわかるかも。

# 『Girls Dead Monster』

一ヶ月後

「『ええ〜…投票の結果、生徒会長に紅草 甚八、生徒会副会長に東雲 雪となりました。2人には期待してますよ。』」

と手短に校長からの報告が集会でされた。

保健室

「ってことで今から生徒会の顔合わせに行ってくるわ。」

「……………行つてきます。」

甚八と雪はこれから現生徒会の他のメンバーとの顔合わせがあるので生徒会室へと向かった。

「ああ、行っていい。」

### 学習棟A棟

ここはいつも授業で使われている学習棟B棟とは違い部室や特別教室がある。

九十九は一回もこのA棟には来たことがなかった。

しかし、甚八と雪の所属する生徒会室はこの学習棟A棟にあるのだ。

生徒会の顔合わせが終わってから『死んだ世界戦線』について調べるために来ている。

「まだ全然終わりそうに無いな……。ちょっと部室とかでも見てみるか。」

と

### 保健室

「ってことで今から生徒会の顔合わせに行ってくるわ。」

「……………行ってきます。」

甚八と雪はこれから現生徒会他のメンバーとの顔合わせがあるので生徒会室へと向かった。

「ああ、行ってこい。」

## 学習棟 A棟

ここはいつも授業で使われている学習棟 B棟とは違い部室や特別教室がある。

九十九は一回もこの A棟には来たことがなかった。

しかし、甚八と雪の所属する生徒会室はこの学習棟 A棟にあるのだ。

生徒会の顔合わせが終わってから『死んだ世界戦線』について調べるために来ている。

「まだ全然終わりそうに無いな……。ちょっと部室とかでも見てみるか。」

と足を動かす。



## 空き教室

しばらく歩いたところに空き教室と書かれたプレートを見つけ、本能的にその部屋へ入っていく。

「こりゃあすげえな……。」

とこの世界に来て何回驚いたかは分からないが感心の大きい驚きを見せる。

そこには三本のエレキギター、一本のアコースティックギター、一本のベース、ドラムセットとバンドのセットがあった。

そして教室の黒板には『Girls Dead Monster』とでっかく書かれていた。

寄せ書きのようなものでびっしりと埋められた黒板を見て

「こいつらも『死んだ世界戦線』で卒業してつたやつらなのか…。

岩沢、ユイ、ひさ子、関根、入江……。

お前らが『Girls Dead Monster』のメンバーだったんだな。

お前らは自分達がしたい音楽が出来たのか？

卒業したんだよな、『死んだ世界戦線』の1人として、『Girl's Dead Monster』のメンバーとして…。

なあ、『死んだ世界戦線』は何で卒業しようと思ったんだ？

オレはお前ら『死んだ世界戦線』の事を全く知らない。

いや、最後の1人だけ見れたんだよな。

もう少し、もうあと5分待ってくれたらオレはお前らたち『死んだ世界戦線』になれたのか？

そしたらオレはお前らみたいに卒業出来たんだよな。

それともオレは記憶がないからまだ卒業できないのか？

東雲や甚八は自分の記憶を持つてる。

2人とも悲惨で壮絶で未練ばっかりの生前だった。

でもオレには記憶がない。

はつきり言って怖いんだ…。

オレの生前がどんなだったか。

あいつらは今でも苦しんでる。

死んだ今でも苦しみ続けてるんだ。

それなのにオレはあいつらに何1つしてやる事が出来ないんだよ。オレは自分の過去を知って、3人で笑ってここから卒業したいんだ。お前らみたいに、『死んだ世界戦線』みたいになあ、教えてくれよ。

オレたちはどれだけ苦しまなきゃいけないんだ？ 『死んだ世界戦線』ってなんなんだよ。

どうやったらお前らみたいに楽しそうにここから卒業できるんだよ……。」

涙を目に浮かべながらそつとサンバーストのストラトのヘッドを触れてみる。

その瞬間、九十九の体に何かが流れ込んできた。いや、流れ込んできた、というよりは九十九自身から溢れ出てきたのだ。

「なん……だ……よ……これ？」

頭に浮かぶ知らない風景、知らない人。

見たことがある気がするギターを片手に自分に話しかけてくる女性。

そして鏡に映るのは九十九だった。

「これ…まさかオレの記憶か……？  
あの女は誰なんだ！？」

自分の記憶らしき映像に出てきた女性が誰なのかを知りたく、  
ギターを手に取りストラップで肩に掛ける。

そしてギターのチューニング、アンプのチューニングを完璧にして  
弾き始める。

（なんでオレ、チューニングが普通に出来んだ？  
それにこのトレブルの絞り方、固くも柔らかくもなくって聞きやすい。  
オレはこの音をしってる。）

30分ほど弾いてエフェクターを使い始めた。

（オレがいつも使ってたのは確か『440』だったな。  
それであいつが『441』だったっけな？）

と微笑みながらエフェクターを『441』に合わせる。

（『440』と少ししか変わんないじゃん。

でも『瞬<sup>またき</sup>』にとってはこの少しが大切だったのかもな。

……瞬<sup>またき</sup>って誰だ？）

ギターを弾く手を止める。

（オレは生きてた時音楽をやってたのか！？）

「『キーンコーンカーンコーン』」

と九十九の思考を止めるように、下校のチャイムが鳴り響いた。

「甚八と東雲、会議終わったかな。」

とギターを置き空き教室を後にした。

学习棟 B棟

生徒会室

「……っということとで今日の会議は終了です。……これからよろしく願います。」

生徒会の生徒が生徒会室からぞろぞろと出ていき、雪と甚八が残った。

「お疲れさま、紅草。  
よく頑張ったわね。」

「……ありがとう。……東雲さんもお疲れさま。……少し緊張したけど東雲さんのお陰で頑張れたよ。」

初回の会議の健闘を讃え合う2人。

「そろそろ九十九が来る頃ね。  
私喉乾いたから何か飲み物買ってくるわね。」



と雪も生徒会室を後にした。

ガラッと生徒会室の扉が勢いよく開かれた。  
扉の向こうに現れたのは九十九でもなく雪でもなく見知らぬ一般生徒だった。

「……………えっと……………生徒会室に何か用ですか…？」

「用という用はないんですけどね。ちょっと伝言を伝えに来たんですよ。貴女方三人にね。」

えっ僕たちに、と甚八が言ったが同時に生徒会室の扉が開かれたのでかき消されてしまった。

「あ、わりい。まだ話し中だったか？」

そこにいたのはこれからのことを話し合うためにきた九十九だった。

「貴方にも聞いてほしい話なので別に構いませんよ。それより中に入っていただかないと後ろの方が入れませんよ。」

九十九の後ろには飲み物を買って戻ってきた雪の姿があった。

生徒会の机に3対1の形で向い合わせて座った。

「さて、これでお三方が揃いましたね。  
私がここに来た理由はこれです。」

3人の前に一冊の日記が置かれた。

そこには『生徒会 活動議事録 立華 奏』と書いてあった。

「『立華 奏』って九十九が見た卒業証書に書いてあって、しかも前生徒会長じゃない！」

「そうです。これは『立華 奏』さんが残したこの世界の『日記』のようなものです。」

これをどうするかは貴方たちに任せます。  
私はただこれを渡しに来ただけですから。」

それではっと言って一般生徒は席を立った。

「ちょっと待ってくれ。」

しかし九十九が呼び止めた。

「どうしてオレたちにこれを渡しに来たんだ？  
それにあんたはただの一般生徒じゃないだろ？」

再び一般生徒は椅子に腰を掛ける。

「私は貴女方になるべく早く消えてもらいたいですよ。  
そしてその足掛かりになるものがその『日記』に書いてあります。  
そして私は貴方の言う通りただの一般生徒じゃありません。  
私は『Angel Player』というソフトによりある人間に  
作られた特別な一般生徒です。」

九十九の質問に淡々と答えていく一般生徒に対し、新たな疑問が浮かんで来る九十九たち。

「なんでオレたちに消えてほしいんだ！？」  
『Angel Player』って何なんだ！？」

再び質問を繰り返す。

「貴女方には愛が生まれかけています。そしてこの世界は愛を営むには最適の場所です。」

何故ならここにいる間は歳を取りません。そして時間は永遠にある。それを避けるために私が『Angel Player』を使ってその者たちを排除するのです。

「Angel Player」は人を改造するソフト、とても言うておきまじょうか。

前生徒会長の『立華 奏』は『Angel Player』を使い『死んだ世界戦線』と対等…いやそれ以上に戦ってきました。

そして私はこの世界に愛が生まれた時、一般生徒を使い彼らを排除しようと思いました。

しかし全員やられてしまいましたかね。」

と言って一般生徒は席を立ち、部屋を出て行ってしまった。

真実（前書き）

更新遅れましたm（  
）（ m（汗（

## 真実

「……………出でっちやったね。」

「出でったわね。」

「出でったな。」

一般生徒が立ち去り沈黙が訪れる。



そして自然に3人とも同じ方向を見た。

その視線の先にあるものは先ほど一般生徒が置いていった『立華奏』の日記だった。

「やっぱり途中から少しおかしいと思ってたんだ……。確かに『直井 文人』と『立華 奏』は『死んだ世界戦線』の卒業式にいた。

だけど『死んだ世界戦線』は校長室で見た通り武器なんかを大量に持ってた。

でもそれって学校の風紀を乱す物じゃないか？

生徒会ってというのは学校の風紀を正して、生徒の模範とならなきゃいけない存在だ。

それなのに生徒会長っていう立場の生徒がそんなものにいるわけがないんだよ！」

九十九が自分の考えを2人に伝える。

「でもそんなの分かりっこないわよ。『立華 奏』も『直井 文人』ももう卒業しちゃったんだから。」

九十九が日記を持ち上げる。

「その答えがこの『日記』の中に書いてあるとしても?」

「……でもそれって生徒会の活動議事録でしょ?」

「けどさっきの一般生徒は『日記』みたいなものとも言ってたろ?」

そう言い『日記』を開いた。

×  
月  
日

やっと生徒会に入ることが出来た。

これからはここに来た人たちをちゃんと卒業させてあげられるように頑張る。

月 日

今日は何人かの生徒がいきなりボイコットしちゃって大変だったわ。

なんか『死んだ世界戦線』っていいのを作っただけ、あんまり騒いでほしくないわね。

月 日

校長先生が校長室から追い出されたみたい。

また『死んだ世界戦線』の作業らしいわ。

生き生きしてるのはいいけど少しやり過ぎよ。

あ、今日『Angel Player』っていうのを捨てたわ。

なんだか面白そう。

月 日

『Angel Player』で自分に能力を付けれることがわかったわ。

『死んだ世界戦線』が色々武器を作ったみたい。

今度ちゃんと注意しなきゃね。

月@日

いきなり『死んだ世界戦線』が夜に食堂でゲリラライブをしてたわ！

我慢できなかったから『Angel Player』を使って注意したわ。

そしたらちゃんとやめてくれたけど、活動届け書出してもらわないと困るわ。

月 日

夜に校庭を見回りしたら男子が話しかけてきたわ。

どうやら『死んだ世界戦線』は私のことを天使って呼んでるみたい。

でもねその男の子心臓がなかったの！

やっと会えた！

ここまでで日記は終わっていた。



「九十九の言った通りだったわね。  
でも何故そんな彼女が『死んだ世界戦線』と卒業式をしたなのか不  
思議だけど。」

『手紙』(前書き)

すいません(汗)

かなり遅れましたm  
——( )  
m

でも今回は長めです!

『手紙』

「まあとにかく一步前進したな！『立華 奏』と『死んだ世界戦線』は元は敵同士だった。謎は一個解決したんだな。」

と『立華 奏』の『日記』を閉じる。

すると最後の1ページから紙が少し飛び出した。

「「「あっ……………！」「「「

と3人同時に声を漏らす。

「何かしらねいね？」

雪が飛び出した紙を取り出してみた。

それは一通の封筒だった。

「……………手紙……………かな？」

と甚八がいう。

「誰宛なのかしらね？」

『立華 奏』の『日記』から出てきたことは本人が書いたものでしょうけど。」

封筒を反対側に返しなから言う。

「『この世界に来た「人」たちへ』だって。どっちら私達宛みたいね。」

「んじゃ、早速中を読んでみよっぜ。」

コホンと雪が咳払いをひとつしてから読み始める。

『この世界に来た人たちへ』

私はあなた達より先にこの世界に来て、先に卒業していきます。

でもその前にこの後この世界に来て戸惑う人もいるかもしれません。

だからその人達のために先に卒業する私がアドバイスをしたいと思います。  
います。

その前にある人達の体験を覚えておきたいと思います。

この手紙を読んでいる頃にはもうないかもしれませんが、校長室には校長先生はいませんでした。

その代わりに校長室には死んだ世界戦線という数人の生徒達がいま  
した。

彼らは生前過酷な人生を送り息絶えてこの世界へ来て、  
その人生を呪い神への復讐をするために集った集団でした。

死んだ世界戦線のリーダーの仲村 ゆりさんはその中でも最も自分  
の人生を呪い、  
死んだ世界戦線の先頭に立ち、葛藤を繰り広げていました。

仲村 ゆりさんは試行錯誤をしながら神への復讐の糸口を調べていました。

そして彼女は一筋の希望の光を見つけました。

それは天使と呼ばれる存在です。

その天使とは学園で校則を破り続ける彼女達を止めるために促していたただの生徒会長でした。

その生徒会長は私です。

私はある日拾ったAngel Playerというソフトを使って色々な能力を自分に付けていきました。



それは武器を作り始めた死んだ世界戦線と対等の實力を持ち、  
校則を守らせるための唯一私に出来ることでした。

長きに渡り私達は争い続けてきました。

ですがその長い戦いも終わりにする人がこの世界に来ました。

その人は記憶を無くしさ迷ってこの世界に来ました。

その人の名前は音無 結弦。

彼は仲村　　ゆりさんの勧誘で死んだ世界戦線に入隊しました。

彼も周りと同じように私と戦っていました。

しかし彼は他の死んだ世界戦線のメンバーとは違い必要以上に私に接触してきました。

そう少し変わった生活が少し続いた時に1つのきっかけが起きました。

それは定期テストで私は死んだ世界戦線の策略にはまり生徒会長を解任させられました。

そして生徒会長代理として副会長の直井 文人君が適任されました。

直井くんも本当は私達と同じようにこの世界に来た人間でした。

直井くんは死んだ世界戦線をほぼ全滅させました。

そのとき私は結弦と一緒に校則を破ったとして反省室という牢に入られました。

Angel Playerを使い、牢を脱出して戦場へと急ぎました。

そこには倒れた死んだ世界戦線がたくさんいました。

そして結弦は直井君に止めさせました。

直井君は自分の存在を認められたかったといい、  
自分の存在を認めてくれた結弦に付いていくことを決めました。

直井君は死んだ世界戦線に入隊し、ゆりの命令で結弦の記憶を取り  
戻すよう言われました。

直井君には長くこの世界に居続け催眠術が出来るようになっていた  
のです。

そして命令に従い直井君は結弦を催眠術にかけて記憶を取り戻させました。

しかしその時取り戻した記憶は全てではなく、他の人たちと同じように過酷なままで終わっていました。

そして結弦はその残酷で過酷な人生受け入れ死んだ世界戦線に居続けることを決心しました。

そのあと私と死んだ世界戦線が一緒に卒業ことになった事件がありました。

直井君の一件も落ち着き死んだ世界戦線は食料調達のために川釣りに出かけました。

その川には主と呼ばれる巨大な魚が住んでいました。

普段ならその主が水面の方に向かってきたらすぐに帰るのですが、その日はみんなと協力して釣り上げました。

私がみんなを主をつつたときの反動で持ち上げてしまい、主の口の中へ一直線に落ちていつてしまいました。

そのとき私の Angel Player のハーモニクスという分身を出す能力が無意識のうちに発動してしまったのです。

ハーモニクスはオリジナルの私とは違い、戦うことだけを考えた分身でした。

みんなは助かったのですが膨大な量の主の切り身は全て食べられるわけもなく、

一般生徒に調理して配りました。

その片付けをしているときにボロボロになったゆりと共に  
無意識のうちに発動してしまった分身が現れたのです

私はその分身を消すことが出来なかったので、ハンドソニックで相  
討ちになることを決め、相討ちしました。

そのあとのことはあまりよく覚えていませんが聞いた話によると、  
私は医療室で眠っていましたでしたが分身が私を気付かれないうちにさら  
ってしまっただけです。

そして結弦を中心とした死んだ世界戦線のメンバーが私を助けるた  
めに学校に地下に広がるギルドと呼ばれる場所に助けに来てくれた  
らしいです。

分身は分身を生み出しました。

そのせいで死んだ世界戦線は壊滅状態だったらしいです。

そして結弦が私の元に来てくれてハーモニクスを一度使ってくれと言ってきました。

ゆりがハーモニクスを使うと自動的にオリジナルの私に戻るようにプログラムの書き換えをしてくれたらしいです。

127

死んだ世界戦線に壊滅させた分身達は私と同化しました。

そして私は激痛と共にまた意識を失いました。

私は凶悪な分身達に負けないよう自分の中で戦いました。



分身達に勝ち、私が再び目を覚ますと医療室の天井が目に入りました。

そして胸の上に重みを感じ目を移すとそこには結弦が静かな寝息をたてていました。

結弦の頭をそつと撫でてみました。

結弦はそれで起きてしまいました。

そして結弦は自分の記憶が全部思い出したのです。

その時私は確信しました。

結弦には心臓がなかったんです。

それは生前、電車の事故にあい、トンネルの中に閉じ込められ、1週間なんとか生きてきました。

そして救助が来たときに結弦はわき腹の怪我のせいで亡くなったのです。

しかし、彼は死ぬ直前に自分のドナーカードでドナー登録をしたんです。

自分が死んでも心臓などは死なずに他の人の体で生き続けると、他の人をその人が死ぬまでの命を自分が繋ぎ止められると彼は言ったのです。

そしてそれは幼いたった一人の家族を病気で亡くし、医者を目指していた結弦にとってはとても報われたものだったと私に言いました。

私もその結弦のおかげで青春を送ることが出来ました。

私は生まれつき病を患っていてそれを治すには移植しか方法がありませんでした。

いつものように病院のベッドでテレビを見ていると先日の電車の事故で救出ができたというニュースが入ってきました。

死亡者は二名で身元の確認中だとテレビは言っていました。

すると病室のドアが開き担当の先生が入ってきました。

それは私のドナーが見つかったというものでした。

担当の先生はその時、テレビを慌てて消したのでこの人だとすぐにわかりました。

手術は成功し私は元気になりました。

大人にはなれなかったけど、とてもとても短い青春だったけど私にとっては本当に幸せでした。

ただ事故にあって私に命をくれて青春を送らせてくれてくれたその人に『ありがとう』言えなかったこと以外は…。

結弦がこの世界に来たばかりの時に結弦の胸をハンドソニックで刺した時に気づいた。

正確に心臓の位置に刺したはずなのにそこには心臓がなかったんです。

私は結弦が私の探している人かも知れないと思いました。

でも結弦には記憶が無かったので断言はできませんでした。

そして私の胸の上で眠っていた結弦は記憶を取り戻し、私は確信しました。

結弦が私に命をくれた人なんだと。

結弦は自分の心臓の鼓動を聞き続けたからそれが影響して記憶を取り戻したと思いました。

結弦には言ってますがいつかちゃんとお礼が出来るといいです。

結弦は自分の人生も残酷で過酷だったけれど小さな幸せでその人生が報われることを死んだ世界戦線の人々にも知ってほしいと思います。

私はそのために生徒会長になったのももちろん結弦に協力しました。

結弦の提案でGirls Dead Monsterのメンバーのユイちゃんを卒業させてあげることになりました。

ユイちゃんは生前、幼い頃交通事故にあい体が動かなくなってしまいました。

ユイちゃんはテレビで見たようなバンドやサッカー、野球を試してみたいです。

そして女の究極の幸せの結婚も。

ユイちゃんは生前動かせなかった体を動かさせてすごい楽しかったと結弦に言いました。

でも結弦は結婚というユイちゃんの夢はどうしても叶えられてあげられませんでした。

そこでユイちゃんと結婚の約束をし、卒業させてあげたのは結弦の

親友の日向 秀樹さんでした。

日向さんは私達のしていることに気づき、手伝ってくれることになりました。

ユイちゃんがこの世界から卒業してすぐのことです。

この世界に異変が起きたのは。

それは人ではない一般生徒が何らかの原因で影のような姿になり人へ襲うようになったのです。

ゆりも異変に気づき、死んだ世界戦線の総員での集会が開かれました。



その場で結弦は今自分がしていることをみんなに話しました。

もちろんそれは死んだ世界戦線の存在意義に反するものでした。

しかし死んだ世界戦線のみんなは追い詰められた状況でそれぞれ答えを見付けました。

そして死んだ世界戦線の古株の数人以外がこの世界から卒業しました。

そして残った私と死んだ世界戦線は力を合わせて影の撃退、  
ゆりはギルドに原因があるとし単身で乗り込みました。

ゆりが一般生徒の影化の原因を解決してくれたらしく、影は次々と  
消滅しました。

そして残っていた死んだ世界戦線のメンバーはまた1人、1人と卒  
業していきました。

この世界には残った人は私も含めたった5人へとなりました。

そこで私は卒業式をしようと提案しました。

私は卒業式をやったことがなかったのです。

だから最後の思い出にみんなで卒業式をしたいと思います。

結弦に相談したらすぐに了承をくれてみんなですることになりました。

これから私達は卒業してしまいます。

卒業して生まれ変わったら記憶にお互いのことは覚えていないかも  
しれません。

でも魂に残し合った記憶は絶対に忘れません。

これが私達のこの世界での話です。

ある人には過去に立ち向かう勇氣が必要でした。

ある人には夢を叶える努力が必要でした。

ある人には長い時間と仲間が必要でした。

生前に思い残したこと、叶えることができなかった願い、それを実現するには何が必要ですか？

そしてもう一度あなたの人生を思い返して見てください。

残酷で過酷な人生にも必ず幸せなことや報われたことがあるはずで  
す。

どうかこの世界に留まり続けることだけはしないでください。

人は前へ進まなければいけないのです。

ここは学校です。

あなたが笑って卒業できることを祈っています。

元生徒会長 立華 奏より

## それぞれの思い

雪が手紙を読み終わり、ふうと一呼吸おく。

「こいつは自分のしたいことちゃんとできたんだな……。」

「……僕の未練に必要なものはなんだろう？」

九十九と甚八は思い思いに口にするが雪は

「私の護りたいものはここには無いわ……。  
私の人生には『私』って存在はなかった……。  
幸せなことなんて一つも無いわ。」



それを聞いた九十九は、

「東雲、確かにお前の生きてた時は苦しかったと思う。  
でもさ、『立華 奏』もいってたじゃん。  
前へ進まなきゃいけないんだって。

お前と甚八はオレと違って記憶がある。

お前らは前へ進むスタートラインに立ってるんだよ。

それってオレからしたらすげえ幸せなことだと思うぞ。

生きてた時が辛かったならここで楽しい思い出作ってさ

次もこんな楽しいことがあると良いなって思っただけだ。進むっていうのも  
ありだと思っただけだ。

辛いのはお前だけじゃないんだ。それぞれに辛いものを持ってると  
だ。

でもそれを分かち合うのが仲間ってもんじゃないか？

辛いときには相談にも乗ってやるから安心しろ、な？」

と雪を励ます。

すると雪の目から溢れんばかりの涙が出てきた。

「ここに来る前に泣いてたやつにそんなこと言われたくないわよ！」

と袖で涙を拭いながら言う。

「……………それ本当なの、霧島くん？」

「あつ…えつと……………その…な！」

あくびしてたんだ！何回もしてたから涙の後が残ったのかなあゝな  
なんて。ハハハ…。

泣いてたさ！悪いか！

オレだってな記憶が戻らないから怖いんだ！

何も思い出せないで卒業できずにここにずっといるかもしれない！  
記憶のあるお前らが先に卒業しちまうかもしれない！

もし、記憶が戻ってもその生前にちゃんと向き合えないかもしれないな  
い！

記憶が戻ることとも記憶が戻らないこともオレは怖いんだよ！」

雪ほどではないが九十九も微量の涙で目を潤ませながら言った。

「……僕もホントに怖いよ。」

霧島くんとは違って記憶はあるよ。

でも……その記憶の中から未練を見つけられる自信がない……。

……それを見つけられても未練をなくすことができないかもしれない……  
いんだ。」

こんな会話が三時間にも渡り続いた。

気が付くと外は漆黒の空、煌々と光る外灯で包まれていた。

「そろそろ部屋に戻るか。」

オレたちの部屋に。」

それぞれの思い（後書き）

感想待ってます

## 決意の朝（前書き）

一区切りついたので主人公目線に切り替わりました。

## 決意の朝

目が覚める。

いつもの様な青空はなく鉛色の空が広がり雨が降っている。

いつからだろう。

こんなにも雨が嫌いになったのは。

この世界に来てから雨の日になると頭痛がしてなぜかわからないけど気持ち悪くなる。

きっとまだオレが生きてるときに雨の日になにかがあったのだろつと想っ。

この世界に来てから点の様に自分の記憶を思い出してきた。

だけどそれが線になり記憶が元にもどる感じは全くと言っていいほどない。

どうやったらもどるのか昨日の『立華 奏』の『手紙』を見つけてからそれしか考えられない。

せめて『直井 文人』がこの世界に残ってくれてたらオレはどんなに楽だったか。

東雲や甚八と違い、この学校に閉じ込められている気しなくなつた。

オレの中から『卒業』っていう概念が消えていった。

なにかもがどうでもよくなったオレは東雲や甚八と一緒にいるべ

きではないと思う。

とはいえこの世界に身を隠す場所なんてない。

ギルド…。

そうだ！

ギルドに行けばいいんだ！

だけどオレはギルドの入口が分からない。

おとなしく記憶が戻るのを待つしかないんだ。



雪と甚人はまだ寝息を立てている。

今はまだ朝の5時。

いつもならまだ寝ている時間だけど雨の日だといつこともあり、早目に目が覚めてしまった。

寝汗がひどい。

雨の日はいつもそうだ。

雨の日には夢を毎回見る。

どんな夢かは目が覚めると覚えていない。

でも毎回同じ夢だということだけはなぜかわかる。

とにかく今はこの汗を流したい。

保健室      シャワールーム

シャワーを浴びながら考えてみる。

これからどうしよう。

とにかくあいつらと一緒に行動するのはもう止めよう。

今日一日かけてギルドの入口を探すしかないか……。

また独りか…。

……またってどういうことだ？

「ぐあぁーっつて……。くそっつ。」

この頭痛は……。

記憶が戻ってくるのか……。

『孤高の一匹狼っていうよりはただの雨に濡れた可哀想な仔犬みたいよ。』

こんなとこにいないで私の家に来ない？

大したことは出来ないけど雨には濡れないわよ？』

『……うるせえよ。』

オレは独りでいる方がいんだ。

お前はその大したことは出来ないけど雨には濡れない家にとっとと帰りやがれ。』

『もっつ！』

そんなこと言って風邪ひいたら困るでしょ！  
さっ、立って！』

「こ………れは………？  
瞬なのか？」

何度かオレの記憶に出てきやがる。

『瞬』。

この人がオレの記憶の鍵を握っているに違いない。

何かきっかけがあれば……。

やっぱりあいつらと一緒に行動した方が記憶は戻りやすそうだな。

食堂

やべえな。

なんだこのいつもにはない重い空気は！

飯が不味くなる！

「あのさ……オレ昨日から考えたんだ。」

2人に話しかけてみる。

「何を？」

東雲ナイス！

これで少しは会話が続くぞ！

でもその突き刺さるような視線は止めてくれ。

切り出しにくくなる。

「だからこれからオレ達がどうするべきか、だよ。  
できればオレはお前らと一緒に卒業したい。」

さあ、2人とも何か言ってくれ。

「……僕もみんな卒業したい。」



「私はどっちでもいいわよ。  
でもそれより前にどうやって卒業出来るようになるの？  
私たちにはそれぞれに未練があるわ。  
それを無くさない限りここからは卒業出来ないからね。  
私はとりあえずこの学校の剣道部に入ることにしたわ。  
あなたたちはどうするつもり？」

東雲はすごいな……。

東雲なりに前に進んでる。

それに比べてオレは前を向くどころか逃げた…。

そんなんじゃないダメだよな。

オレたちは前に進まなきゃダメなんだよな。

「……………僕は……………生徒会を頑張る！」

……もう2人には用はないかもしれないけど……僕は精一杯やってみ  
たい！」

甚八……お前もすごいな。

あとはオレだけか……。

オレの記憶に深く関わってるあれしかないよな。

「オレは……軽音部に入ろうと思うんだ。

お前らには言っただけでなかったけど、オレは生きてたとき音楽をやっ  
た気がするんだ。

戻ってきてる断片的な記憶には必ず音楽が関わってる。

多分何か関係あるに違いない。」

言いたいことは全部言ったぞ。

「じゃあ全員分答えが出揃ったわね！」

東雲の声デカっ！

なんかめっちゃくちゃ張り切ってるな。

「これからは別行動！」

未練を無くすまでは一切の干渉はなし！

これからは一般生徒として過ごす！」

いや、無理だろ……。

決意の朝（後書き）

感想待っています。

## 壁（前書き）

文化祭、球技大会等々で更新遅れました。

壁

別行動が始まってから1週間。

東雲と甚八はそれぞれちゃんと活動している。

そしてオレは……。

5日前

オレは今職員室の扉の前に立っている。

ここで初めて東雲に会ったんだよね…。

そんなことを思いながら扉に手をかける。

もちろん軽音部に入部するためだ。

ガラツと音がなり扉を開く。

近くにいた先生に話しかけてみる。

体育の先生だろうか。

ジャージを着ていて、普通にマツチヨで威圧感がハンパない。



だがしかしbut贅沢は言ってられない。

「あの～すいません。

軽音部の顧問の先生はどちらに…？」

「うちの学校に軽音部なんてない！  
貴様、ふざけてるのか？」

えっ！…？どういふこと？

「で、でも楽器とかありましたよね？」

「あれは勝手に持ち込んできたものだ！

まさか貴様あいつらみたいなのはしないよな？」

あいつら？

あんなこと？

何言ってるんだ？

ってか超怖いよ。

この先生怖すぎるよ。

「えっとだれが何をしたん…ですか？」

「この前卒業したばかりのガキどもだ！  
部の申請すらしないで活動しやがって！」

しかも何がゲリラライブだ！  
いい加減にしろっ！！！！！！」

なんで勝手にキレてんの？

もうやだ…。

「じゃあ…」とにかく軽音部などないし作らせません！」「……はい。」

くそっ。

どうしたらいいんだ……。

「九十九じゃない！  
どうしたのそんな浮かない顔して？」

後ろからいきなり声かけるなよ。

ビクビクするじゃん。

「なんだ東雲か…。  
いや別にちよつとな…。」

「なんだとはなによ！  
絶対なんかあったでしょ。」

なんでこいつこんなに鋭いんだろ？

「実はな軽音部ないんだって。  
しかも作ることもダメなんだって。」

「なんでダメなの？」

そこはスルーしようよ……。

「えつと…な。」

『死んだ世界戦線』に『Girls Dead Monster』  
ってバンドがあつたんだ。

そいつらが部活として活動してなくて勝手にやってたからだとさ。  
だからオレもおなじ事するつもりだろって言われてさ…。」

「なにそれ？」

っていうか九十九はそれで引き下がっちゃったわけね。」

ため息つきながら言わなくても…。

「……………まあそうなるな。」

「そうなるな、じゃないわよ！」

どうせ聞いた相手は普通の教師だったんでしょ。

だったら次は校長先生にお願いしてみなさいよ！」

「いきなり校長に行くのか!？」

「そうよ」

「ちょっと待ってっ！」

校長に聞きにいくってことはあの校長室に行くって事だよな!？」

「だから何よ？」

……………あ。

確かに危険ね。」

やっと気付いたか。

「校長室に行くにはあのトラップにかからないようにしなきゃいけないんだぞ！」

「下手すりゃ死ぬぞ！」

まあ死なないんだけどさ。

そんぐらいの痛みを味わいたくはないよな……。

「じゃあどうやって校長先生に会うのよ？」

問題はそこだよな……。

『ピンポンパーンパーン』

「生徒会長 紅草 甚八至急職員室へ。」

「あ、校内放送を使えばいいんだ！校内放送なら絶対に校長先生の耳に届くはずだ！」

「じゃあ校内放送で呼び出しなさいよ。

私ができるのはここまでね。

あとは九十九がやらなきゃいけないことよ。」



壁（後書き）

なんか九十九のキャラが崩れてきてる気が…。

感想お願いしますm ( ( m

放送（前書き）

スランプだ（、、）

全く思いつかばなかった…。

内容はいつも通り薄い気がしますけどww

放送

とは言われたもののどうやって校内放送をやるう……。

職員室に行って使わせてくださいと言って使わせてくれるようなものでもないしな…。

特にあの先生に見つかると面倒だよな…。

まあ見つからないようにやってみるか。

職員室

「失礼しまゝすつ。」

あの怖い先生はいないな。

おっ！

あの太った白衣の先生なら使わせてくれるかも！

なんだか優しそうだしな。

「あの〜せんせ？」

「…ん？私かい？」

「はい。あの…放送使ってもいいですか？」

「どうして？」

そつくると思ってたぜ！

「校長先生にちょっと相談があるんですけど、全く見つからなくて…。  
その…しょうがなく……。」「

なあ、どうだ！？

「校長室にはいなかったのかい？」

問題はないな。

「はい……。校長室に行ったんですけど不在だったみたいで……。」

「ん……。分かった。使わせるのはダメだから私が放送で呼び出してあげるよ。それでもいいかい？」

「よししゃー……！」

「はい！もちろんです！ありがとうございます……！」

「じゃあちょっと待ってなさい。」

『ピンポンパーンパーン』校長先生、校長先生至急職員室へお  
願いします。』

さっきの先生ちゃんとやってくれたな。

「じゃあ校長先生来るまで待っててな。」

十分後

ガラスと職員室の扉が開く。

「お待たせしました。

私に用とはなんですか？」

へえ〜この人が校長なんだ……………なんか普通だな。

「ええと…実はこの生徒が校長先生に相談があるみたいなんです。」

「私に相談が…？」

「君がかね？」

「はい！でもあんまり他の先生には聞かれたくないんで他のところでいいですか…？」

「別に構わないよ。」



## 進路相談室

「で、私に何の相談をしたいのかね？」

いよいよ、いよいよだ。

オレの記憶を取り戻す（かも）第一歩だ！

「えっと……その……新しく軽音部を作りたいんです。前から軽音がやりたくて……」。

でもこの学校には軽音部がないと聞いて。  
それでもオレは軽音部をやりたいんです！  
だから…お願いします！  
軽音部を作ってください！！」

「……………作るのは構わない。

しかし、部活を作るには条件として部員5人と顧問の先生1人を集める必要がある。

見たところ君は1人のようだし今のままでは了承することは出来ない。

わかったかね？

作りたかったら人を集めてからまた相談に来なさい。

それじゃ。」

そんなルール知らねえよ…………。

校長先生が部屋から去っていった。

「集まつかな…………人数…………」

腕と脚が力なくだらりと垂らしながら呟きため息をつく。

学習棟 A棟空き教室

いつものようにギターを手の動くままに弾く。

考えては手が止まってしまふ。

体しか覚えていない曲。

それを九十九は無心に延々と弾き続けた。

エフェクターの番号を『441』にして……。

日が暮れるまで……。

延々と……。

放送（後書き）

感想お願いしますm  
——  
m

進み始めた人間たち　そして…（前書き）

書いてるうちに段々ワケわかんなくなって来たので九十九達の途中経過っていう形でまとめました。

毎度毎度更新遅れてすいません（汗）

進み始めた人間たち      そして…

「ねえ九十九、私には夢があるんだ。

私はね日本中を旅したいの。

色んな物を見て、色んな人と会って、色んな歌を作って、色んな人をその歌で笑顔にするの。

それで日本中を笑顔に出来ればなって。

1人でも…1人でも多くの人を笑顔にしてあげたい。

ねえ九十九、九十九には夢とかないの？

ないならさ一緒に行くよ。

九十九と一緒に私はどこまでも行けるから。」

『お前はオレらと同じ世の中のゴミだ！

いくら否定しようが構わねえが嫌でもお前は必ずこっち側に戻ってくるぜ。

俺はそういうやつを何人も見てきたからな。

お前もせいぜいあっち側の世界で苦しみこっち側に戻ってこい。そんなときには手厚い歓迎してやるぜ。

霧島、一旦こっち側に来ちまったからにはあっち側には行けねえよ？  
それとこっち側を裏切ったやつにこっちに戻ってくることはゆるさ  
れねえ。

お前は賢いやつだと思ってたんだがなあ…。

霧島、もう一度聞くぞ。

あっち側に行くんだな？』

『ねえ……九十九……。どう……して……？  
信じて……たの……に……。

ねえ……どうし……て？

答……えて……よ。

つ……く……も……。』

『霧島あ……！……！

どこだあ……！……！……！……！

てめえだけは絶対に逃がさねえぞ……！……！……！……！……！……！

出てきやがれ……！……！……！……！

霧島 九十九……！……！……！……！……！

ぶっ殺してやる……！……！……！……！……！……！……！……！



「っ！  
はあ、はあ……。  
っ夢か……。はあ。」

「まったく…オレは瞬に何をしちゃったんだ……。  
っ！？夢を覚えてる……。！」

今までは目覚めるのと同時にどんな夢を見ていたか覚えていなかったのだが、今朝だけは何故か内容を覚えていた。

「ああ…そうか……。  
昨日ギター弾いたままそのまま寝ちゃったんだけな……。  
っよいしょっど。  
いてっ！…！」

そりゃこんな体勢で寝てたら痛くもなるよなあ…。

昨夜九十九はギターを弾き終わりそのまま壁に寄りかかり、ギターを抱いたような格好で座ったまま寝てしまったので首、腰、脚が固まってしまったのだ。

「とりあえずシャワーして着替えないとな。」

夢を覚えていたとはいえいつもの夢を見ていたのには変わりないのでいつも通り寝汗が凄かった。

そして外へ目を向けると通常の比にならないほどの強い雨が強風に煽られ窓ガラスを叩き続けていた。

## 昼休み

「雨かあ……。  
人探す気になれねえなあ……。  
どうやってたら楽に集められっかな……？」

### 放課後

雨の日にも関わらず練習はいつも通りあった。

長年のブランクとはいえ叩き込まれたことを体が覚えているのでそれほど困ることはなかった。

しかし人と接しているべき時期に人と接すること禁じられたため、人とのコミュニケーションをとるのが苦手になっていた。

そのため誰とも話さずにひたすら稽古をしていた。

そしてその一人でいることと驚くべき剣道の強さゆえにその少女は部の中で『氷の血刀』あるいは舞うように竹刀を振るうその姿を『雪の嵐』と呼ばれていた。

その少女にはなんと呼ばれようが構わない。

すべてを敵に回しても本当に護りたいものが護れるならば構わない。

そうその少女『東雲 雪』は決意し竹刀を今日も振るい続ける。

この学校に悪いところなんてひとつもない。

だから直さねばならないところもよくするところもない。

はっきり言って生徒会はなにもすることがない。

ただ集まって喋って時間になったら帰る。

ただその繰り返しだった。

しかしそのお喋りをその内気な少年は大切にしていた。

人としやべるのが苦手なその会長『紅草 甚八』は今日も生徒会のメンバーとおしゃぶりをするのだった。

どうしてあの人が私を裏切ったの…？

あの人に会って話したい。

あれ？

あの人って誰なんだろう？

でも私はあの人に裏切られたのだけは覚えてる。

早くあって話したい……………。

進み始めた人間たち

そして…（後書き）

最後は誰なんでしょうね

## 二つ目の壁（前書き）

年内に更新できてよかったー。・・・



## 二二二目の壁

??????

苦しい……………。

誰か助けて……………。

あの光の道は何……………？

何だかとても温かそうな光……………。

あの光の道を進めば楽になれそう……………。

そうすればこの憎しみも消えるかな……………。

ってかなんでこの学校って軽音部ないんだよ！

音楽やりたいやつはどうすりゃいんだよ……全く。

九十九は先日校長先生から言われた部員を5人集めれば部を結成できると聞き、どう集めればいいのか考えながら廊下を歩いていった。

そして掲示板の前に張られている大量の部員募集のポスターに目を向け

「やっぱり部員募集の基本はポスター作りだよな…。

んっ？なんだこれ？

『ジャズ研究部』？

ジャズからロックまで幅広くやっています。ぜひ来てください！？

これのせいかなぁあ！！！！！！」

ジャズ研究部がロックもやっているということとはわざわざ軽音部を作らなくてもよいというようになる。

「でも『死んだ世界戦線』の『Girls Dead Monster』のやつらの影響とかで部員数増えてたりしてな…。」

頬をひきつらせながら呟き、昼食をとったら九十九はこの『ジャズ研究部』に話を聞きに行くことにした。

私たちはどこで間違ってしまったの!?

私はただ側にいたかっただけなのに……。

ねえどうして私を裏切ったの?

ねえどうして??

どうして??どうして??





もう少しでこの光の中から抜け出すことが出来る。

そしたらあなたを見つけだす。

だから待っててね……………。

「すいませーん。  
見学したいんですけど、いいですか？」

放課後、九十九は『Girls Dead Monster』について聞くためにジャズ研究部の部室に来ていた。

「あなたが霧島 九十九君ね。  
じゃあそこら辺にある椅子に適当に座って。  
今から練習だけどそれ見学するだけでいいのよね？」

昼休みに事前に部長のところに行き見学させてもらえるように頼んだおかげで嫌な顔ひとつされずに見学を許可された。

練習が終わり片付けを手伝いながら部員たちがいくつか聞いてきた。

「霧島君てさ前に楽器とかやってたの!？」

「まあちよつと前までは…。」

「へえじゃあ何やってたの?」

「エレキを少しやってましたよ。  
よかったら今やりましようか?」



冗談混じりに聞いてみると、

「えっホントに!？」

聞いてみたい!

やって?」

「じゃあちよつとだけ。」

いつもの曲を本能的に弾き始める。

「つとこんな感じですかね?」

「上手いじゃない!

それでうちの部には入るの!？」

もちろんは入るよね!」

プレッシャーすげえな……。

「えつと悪いんですけどその前に1つ聞きたい事があるんですけど  
……。  
……いいですか？」

「何かな？」

「ジャズ研究部の人たちは『Girls Dead Monster』  
『ってバンド知ってますか？』」

「『Girls Dead Monster』……。  
私たちは知らないわよ。」

えつ……。

まさか……。

そんなはずは……。

「もう一度よく思い出してみてくださいよ！  
前に夜にかなり食堂でゲリラライブとかやってたじゃないですか！  
それでも分かんないんですか！」

「そんなこと言われてもねえ…。  
知らないんだからしょうがないわよ。」

ここにいる部員たちが困った顔をしてるのを見てホントに知らない  
と悟った九十九は何も言わずに部室から立ち去った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7281v/>

---

After Beats!

2011年12月24日10時44分発行